

## Alan Dundes : *Interpreting Folklore*

桜井雅人

現代アメリカ民俗学は19世紀的ヨーロッパ志向型の民俗学（たとえば A. H. Krappe）と決別し、また通俗的民俗学（たとえば B. A. Botkin）を否定することによって確立したもので、その時期は1960年ごろと評者は考えている。J. H. Brunvand は *The Study of American Folklore: An Introduction* の改訂版（1978）の序文で、ここ10年間の民俗学の進展は19世紀（創立期）から1968年（第1版刊行時）までの変化と同じくらい目ざましい、と述べている。かの S. Thompson は、その主著 *The Folktale*（1946）が邦訳されているので日本でもよく知られているが、以上のような流れにおいてみると、主としてテキストのみを扱っていることやアメリカの白人民話がほとんど考察されていないことなどから、すでに古いタイプの民俗学であることが理解されよう（もちろん、その価値を否定するつもりはない）。アメリカ民俗学を現在の地位に引き上げた最大の功労者は、何といても R. M. Dorson であり、彼は独立した学問としての民俗学の価値と必要性を説くとともに、その条件である研究方法と研究体制の整備にも努めてきたのである。ちょうどその時期に登場したのが、本書の著者であり1934年生れの Alan Dundes であった。彼は、1962年に20歳台で民俗学の学位を取り、33歳でカリフォルニア大学バークレー校の人類学科正教授となった。多数の論

文を発表しその業績は当初から注目されていたにもかかわらず、著書と言えるものがほとんどなく、わずかに F. F. C. (No. 195) として出された *The Morphology of North American Indian Folktales* (1964) および *The Study of Folklore* (1965) を始めとするいくつかの編著があるだけであったので、日本民俗学界ではあまり読まれていない学者であったようだ（それでも論文2編の邦訳があるし、『日本昔話事典』にも見出しがあるので、まったく無名というわけではない）。しかし、1975年に *Analytic Essays in Folklore* として主要な20編の論文が書物の形として刊行されたので、Dundes の方法が広く理解されるようになることを期待している。

本書は、主としてそれ以降にまとめられた論文から13編を選んで構成されたもので、前の論文集とは2点が重複するが、著者の分析的で理論的な研究はさらに発展を遂げていることがはっきりとうかがえる。書名に示されているようにその中心は「民俗解釈論」であり、世界観 (worldview, Weltanschauung) に強い関心をよせて意味 (meaning) の探究を行なっている。このためには、人類学・心理学・言語学などの成果を積極的に利用するのであり、この下地には異文化研究を行なってきたアメリカ民俗学の伝統がある。著者自身も当初は異文化研究が主体であった。本書は、確かに「民俗」を扱っているのだが、民

俗学なのか人類学なのかその分類は容易なことではない。いや、そのような区分けを超越したところに本書の魅力があるのであって、著者の方法が民俗学から人類学へ傾斜してくるにつれて、その対象は異文化から自分の文化に中心が移ってきたことは、従来からの「自国を対象とするのが民俗学、他国を対象するのが人類学」という図式と逆転していることを示している。たとえば本人が人類学者と名乗っているとしても、その基本的な視座には民俗学的関心が強いことは、冒頭に収録された2論文から十分に読みとれるであろう。

まず第1の論文“Who Are the Folk?”において、“folk”（評者はあえて「常民」と訳す）を「等質的な集団としての小農民層」とする19世紀的概念や R. Redfield の「民俗社会」を受け入れずに、「常民は従属変数ではなく独立変数である」という立場を強調する。これは竹田聰洲の「文化概念としての常民」に似たところもあるが、民俗学における「常民」という概念の位置づけはもっと明快であり、他の考え方との相違や研究方法との関連もきちんと述べられている。つまり、常民の姿は多くの「民俗集団」の中にあらわれてくるのであり、それらは一時的な常民なのである。このことから、民俗学における“code-switching”研究を示唆する。決して「常民」を軽視しているのではなく、「民俗」を通して「民俗集団」を定義しなおしている。著者の方法は、人間と民俗の関係を重視しているのであり、民俗を人間と切り離す研究方法（“the folkless study of folklore”）ではない。民俗学の目標が現代の文化・社会に向けられて、そこに生活する人間を問題にしているから、常民とは我々自身のこととなるのである。次の“Texture, Text, and Context”と題する論文においては、外的条件である「口頭伝承」のみによって民俗を定義しようという試みはうまくいかないことから、

資料そのものに目を向けることによってこのような3種の分析レベルを提示し、民俗の定義のためにはこれらがすべて関与する、と言う。また、物質文化のみならず「書かれた民俗」（たとえば落書き）をも考慮することになる。民俗の意味の解明のためには、テキストのみに依存する方法（我が「重出立証法」や「歴史的地理的方法」も含まれよう）は、はじめから限界があったのである。

その後続く諸論文は、主として現代アメリカを対象とした世界観を探る試みであり、心理学（特に精神分析）を積極的に応用していることが注目される。「正統派」民俗学者たちは心理学を嫌っていると言われるが、「無意識」の存在を前提とすることにより「民俗」もまた研究対象として考えることができるし、ユング学派では昔話研究を重要な課題としてきた（たとえば von Franz）。柳田国男は「心意現象」を「これこそ我々の学問の目的」であると述べているが、「群現象を対象として目的とする心理学は、既往の心理学者の方からも我々の方へ手をさしのべて来るべきが当然」であり「集合心理学又は民族心理学とも名づくべきものの必要とする資料が、フォクロアのほかに求め難いことは明らかである」と言うだけであった。その後の日本民俗学は心理学の重要性さえほとんど考えていないように思える。アメリカ民俗学でも、心理学と言うと G. Legman などを思い起こすせいか（これとても「異端」視する理由はよくわからない、研究対象のためであろうか）、あまり関心を示しているわけではない。心理学側の発展は、それに比べてはるかに著しいようで、最近では「比較土着（民俗）心理学」（cross-indigenous psychology）も提唱されている、と聞く。このような中で、民俗学から心理学への接近は特に注目すべきであろう。

著者は「我々は眼鏡のレンズを通して物事

を見ているのに、そのレンズの存在に気がつかない」という認識から出発し、その「レンズ」を民俗（レンズを通して見えるもの）の研究によって明らかにしようとしている。その方法の一つとして、精神分析的記号論（psychoanalytic semiotics）を提案する。これは、論理性を重視する従来の記号論や構造主義に対して心理的なものを求める方法であり、対象そのものだけでなくその対象が何のために存在し何を意味するのかを研究しようとするものである。著者は、言語学やフォルマリズム（特に、K. L. Pike と V. Propp）を民俗学に適用してきただけに、論理重視の方法の限界を熟知しているのである。また、アメリカ社会が未来志向型であり目的志向型であるという結論自体は目新しいものではないが、その説明方法は民俗を中心とした様々な資料を用い、先述の3つの分析レベルおよび「常民」観などと関連づけながら詳述するのである。そこに登場するのは、形式ばらない挨拶表現・ジョーク・SF 小説・学術論文の形式などであって、ひなびた場所から集められた多量の資料ではない。民俗学を“autobiographical ethnology that provides a unique picture of a people from the inside-out rather than from the outside-in” (*Encyclopedia of Anthropology*, Harper & Row, 1976, s. v. Folklore) と定義する理由は、これら諸論文に一貫して見られるのであり、自らが「同郷人」であり「常民」となることによって可能となる方法である。現代社会における人種や男女の差別についても著者は強い関心を示しており、無意識的に用いられる民俗から多くの事例を出して、いかに根強く

浸透しているのかを説明している。たとえば“John Henry”というバラッドの場合、その表現を検討し「意味」を読みとることによって、むしろ白人の民俗である、と結論づける。評者自身、他人（たとえば G. M. Laws など）からの受け売りで「主に黒人のバラッド」と解説したことがあるので、「目からウロコが落ちる」ごとく、この歌が白人の歌手に好まれてきた背景が理解されるのである。

以上のように、かなり徹底した共時論的方法であり、取り上げる事例も身近なものが多い。たしかに、口承民俗に中心が置かれてはいるが、うなり板（bullroarer）やフットボールなども扱う。もちろん、フットボールそれ自体が民俗であると言っているのではなく、「常民」の理解と同じく、民俗もまたあちらこちらの現象に部分的に姿をあらわしているからである。このような民俗学は、ちょうど言語学が共時論的研究を中心として他の諸科学と関連を深めつつその独自性を主張してきたように、現代の科学として再出発するには必要な手続きであると考ええる。新しい民俗学は、「手短かに言」っても「平民の過去を知ること」だけではない。

なお、感嘆符を多用する文体だけでもどうしても好感が持てなかった。

追記 本稿執筆後、*The Morphology* は池上ほか訳『民話の構造』（大修館書店、1980）として出版された。

Alan Dundes, *Interpreting Folklore*.  
Bloomington: Indiana University  
Press, 1980. xiv + 304 pp.